

*Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. アスナロ (広義)

*Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. var. *dolabrata* アスナロ (狭義)

*Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. var. *hondae* Makino ヒノキアスナロ (ヒバ)

ヒノキ科 Cupressaceae

1.分布：ヒノキアスナロ (ヒバ) は北海道南部から東北地方、佐渡、能登半島まで分布し、アスナロ (狭義) は宮城県南部から本州、四国、九州の冷温帯に分布する。

2.植物体：

幹径 1m、樹高 30m になる常緑針葉樹 (B)。樹皮は赤褐色で薄く鱗片状に剥げる (C)。葉は大形の鱗片状で葉先は丸く、葉裏では白色の気孔帯が目立つ。毬果は 3、4 対の果鱗からなり、直径 1~1.5cm ほど。アスナロ (狭義) は鱗片の先が角状に飛び出る (A) のに対し、ヒノキアスナロは毬果が丸い (D,E)。

3. 利用可能部位：

木材：ヒノキ同様に木材を柱目に薄く剥いでテープ状にし、編みカゴなどの素材とする。

樹皮：薄く剥いでテープ状にして編組素材とする。

根の木材：細く割り裂いて籤状にして編組素材とする。

気根：そのまま、編組素材あるいは縄素材とする。

組織形態：

〔木材〕 森林総合研究所の木材データベース「日本産木材データベース」(<http://f030091.ffpri.affrc.go.jp/JWDB/home.php>) を参照のこと。

〔樹皮〕 アスナロ (狭義) とヒノキアスナロの樹皮の構造は全く同じである。樹皮は淡色で生きている組織からなる内樹皮と褐色で組織が死んでいる外樹皮からなるが (D)，その構造は基本的に同じである (C)。内樹皮と外樹皮の境目にはコルク層が作られ (I)，これによって外樹皮の組織が死ぬ。横断面で見ると層状構造が見える (E~H)。この層構造は厚壁で矩形の繊維細胞の層、篩細胞の層、柔細胞の層、篩細胞の層、繊維細胞の層の繰り返しである (G、H)。放射組織は単列で、背は高くない (I)。

〔根の木材〕

(工事中)

〔気根〕

(工事中)

3. 利用例

木材：木材を剥いでテープ状として編んだ編みカゴなどが現在も生産されている。

樹皮：北海道檜山郡上ノ国町の重要文化財「旧笹浪家住宅」の外壁にヒバの樹皮が使われているという。アスナロ、ヒバ樹皮の編組製品等は知られていない。

根の木材：知られていない

気根：知られていない

#### 4. 遺跡出土遺物：

木材：アスナロあるいはヒバの木材の編組製品と同定されたものは知られていない。

樹皮：「アスナロあるいはヒバ」と種を特定したものはない。「ヒノキ科樹皮」とされるものは青森市三内丸山遺跡の縄文時代前期の小型カゴ編物(いわゆる縄文ポシェット) (青森県教育委員会「三内丸山遺跡42」、2015) などがある。これは同遺跡から出土する木製品には広義のアスナロのみで他のヒノキ科の木材がないことと現在の分布からヒバである蓋然性が高いと考えられている(鈴木三男・小林和貴「青森県三内丸山遺跡出土の小型編組製品(縄文ポシェット) および富山県桜町遺跡出土縄製品の素材植物」植生史研究 20 : 83-88, 2011)。

根の木材：アスナロあるいはヒバと樹種が特定されたものは知られていない。

気根：(工事中)

#### 図の説明

A:ヒバの樹皮。B:剥ぎ取ったヒバの樹皮。左：表(外面)、右：裏(内面)。C&D:ヒバの樹皮横断面と接線面の表面観。Cの上1/4が外樹皮、その下3/4は内樹皮、Dの上の濃色部分が外樹皮、下の淡色部分が内樹皮。E&G:アスナロ(狭義)の樹皮の横断面とその拡大。F&H:ヒバの樹皮の横断面とその拡大。I:ヒバの外樹皮(左側)と内樹皮(右側)の境界部の接線断面。右上から左下に伸びる褐色の色濃い部分がコルク層である。



A



B

